

## 専科としない教師用の家庭科学習指導計画の構成とVTRを用いた授業分析による評価

中 野 刀 子\*

小学校家庭科教育では、男女の教師が指導を行っているが、その実習にあたっては、不完全な指導が行われることが多い。時に、家庭科における学習内容の特徴と、学習行動の多様性にある。そこで、教材の精選と、だれでもができるような家庭科をめざした、学習指導設計を行おうとしている。今回は、教育目標を分析して得られた（学習計画・評価・分析の基本となるような）指導目標細目表を基礎にして、学習計画を試み、家庭科を専門とするA教授者と、専門としないB教授者のそれぞれの授業をVTR、学習ノートを用いて検討した。その結果、家庭科を専科としない教授者に提供する資料は、課題設定とそれにとまなう具体的な教授スキルの資料提供が必要なのことがわかった。

キーワード 家庭科教育、学習指導設計、授業分析

### はじめに

小学校家庭科における、学習指導設計は、各教授者により、指導内容・指導法が違い、一定の指導系を構成することは困難である。また、1人の教授者が作成した教育目標に対して、学習設計を行っても、その利用は、1人の教授者の資料として留まることが多かった。そのため学習指導経験の少ない教授者は、指導経験の多い教授者の学習設計を適用することは、難しく教授者の指導能力を高めることは、本人の経験による以外なかった。

また、時々、家庭科が技術中心的な単なる物造りであると考えられ、テクニックが先行し人間性がおろそかになっている。そのため、教材などもセットものを購入し、一せいで指導のもとで、児童の興味・関心を無視し教授者側の一方通行の授業となっていることが多い。

こうした家庭科教育における問題を解決するために、だれもが（家庭科を専門としない教授者及び教育実習生）ができるような家庭科の学習指導設計を試みる必要がある。

そこですでに学習指導設計の基礎資料として作成した学習指導目標の細目表に従い、授業における教授方法・教授内容を具体化させるため

に、指導案・学習ノートを作成した。

学習ノートは、教授者の教授方法の手助けとなると同時に、学習者に、どのように学習が進むのか、学習の見通しを持たせるものであり、学習に対しての意欲作りにもなっている。そしてこの学習ノートにより、学習者の学習状態を把握することができ、学習指導目標の達成具合を、明確に評価することができる。

今回は、被服領域 第六学年のエプロンの製作（14時間）の設計を作成して、家庭科を専門としているA教授者と、専門としないB教授者が、それぞれ 指導案・学習ノートを用いて、授業実践を試みた。そしてその授業をVTRで録画し、両者の指導内容・指導方法を比較検討していった。（授業行動を単なる記憶やチェックリストだけから再現しても、十分に分析・検討することは困難である。そこで、言語行動ばかりでなく、一連の教授者の動きや学習者の様子に関しても、十分な時間やデータを得るために、VTRで録画した。

### 1. 指導案及び学習ノート作成の概要

#### (1) 目標

目標が達せられるということは、家庭科の学習内容がどのように行動化されたかによって、

目標が達せられたといえる。

小学校家庭科における学習内容と学習行動を考え、作成した指導目標細目表を基礎としながら、目標の検討や学習内容の検討を行なう必要がある。

## (2) 学習計画

### a. 指導案について

指導内容・目標行動を基本として、授業過程の設計を行なう。教授者と学習者の対応を想定しながら、学習形態（個別学習かグループ学習かなど）や資料をどこに入れるのか留意点として何があげられるかを時限ごとに具体化していった。

何を、どのように教えたならば、より指導目標に迫ることができるかを考え、学習ノートとともに授業の流れを組んでいった。

### b. 学習ノートについて

学習ノートを作成するにあたり、次の点を考慮して作成した。

1. 学習指導目標の細目表に沿った内容
2. 生活を見つめることから、課題を出しやすくする。
3. どの教授者（家庭科を専門としない教授者および教育実習生）でも使うことができる。
4. 自分の考えと友達の考えが書ける。
5. グループ学習の中で、問題を出しあいながら、学習を進める方法を取り入れる。
6. 自己評価できる項目を入れる。
7. 学校での学習に終らず、家庭生活へと発展していくことができる。
8. 学習者の学習意欲を高められるような学習者側に立った内容

特に、今回は、3を基本において作成した学習ノートは、児童に学習の見通しを持たせる点で重要であり、学習指導によるひとり、ひとりの定着が、どのようになされているかの指導と評価が容易にできるという利点をもっている。すなわち、児童ひとり、ひとりの学習意欲を向

上させるため、学習目標の達成具合や、その学習法を児童の立場から考え、児童に学習の援助を与えるように、工夫・構成しなければならない。また児童が自己評価できるように、チェック項目を随時設け、評価の対象とした。

ここでは「エプロンの製作」（14時間）の指導案と学習ノートを作成したが、それらを使って、授業実践をしながら、本当のシステム化がなされているかどうか検討した。

## 2. 学習指導設計（指導案）と分析箇所

指導計画（14時間）

- ① エプロンと生活 エプロンの学習計画（1時間）
- ② エプロンの役目（1時間）
- ③ 紙エプロン作り（1時間）
- ④ 型紙作り（1時間）
- ⑤ エプロンの製作計画（1時間）
- ⑥ 布を裁つ（1時間）
- ⑦ ミシン縫い（3時間）
- ⑧ ししゅう（2時間）
- ⑨ ポケットつけ（1時間）
- ⑩ 仕上げ（1時間）
- ⑪ 交流会（1時間）

## 3. 指導方法の分析・評価について

指導内容については、授業の流れの中で、指導目標が達成されているかどうかを、エプロンの全題材について分析した。その結果、どの内容が指導されているか指導されていないか明白になった。しかし、A教授者とB教授者が同じ内容について指導されていても、その指導方法は異なり、児童の発言内容についても違いがみられた。従ってそれぞれの教授者がどのように指導しているのか分析してみる必要がある。

今回は特に話し合いの部分では導入の「エプロンと生活（エプロンの学習計画）の1-G-a、1-F-a、1-C-aについてと、技術指導の部分では、「紙エプロン作り」の2-C-aと「ミシンぬい」の7-C-aについて分析した。

- ・ 1-C-a …… エプロンを使った生活の様子を話すことができる。

- ・ 1-C-a……エプロンの学習内容・順序がわかる。
- ・ 2-C-a……ひもつけ位置・長さ・はば・胸のはばがわかる。
- ・ 7-C-a……三つ折りにする理由と方法がわかる。

以上これらは両教授者とも指導がなされた内容のものである。

分析するために、まずコミュニケーション分析のカテゴリーシステムを作成した。これは、OSIA のシステムをもとに、家庭科の授業におけるコミュニケーションの内容を考えて作成した。そして、このカテゴリーシステムをもとにA及びB教授者の発言を、目標コードごとに分類していった。次に、流れ図を使って、教授スキルが学習者の認知過程に及ぼす影響や教授行動の流れのパターンを調べた。このように、両者の授業分析をすることにより、専門外の教授者が かかえている問題点をさぐり指導案・学

習ノートの改善に役立てる。

### 考 察

家庭科を専門としているA教授者と、専門としていないB教授者を、コミュニケーション分析のカテゴリーシステムに基づいて分析し学習者の認知構造に及ぼす影響や教授行動の流れのパターンをグラフ化してみた。それを比較すると、およそ次のような傾向がいえる。

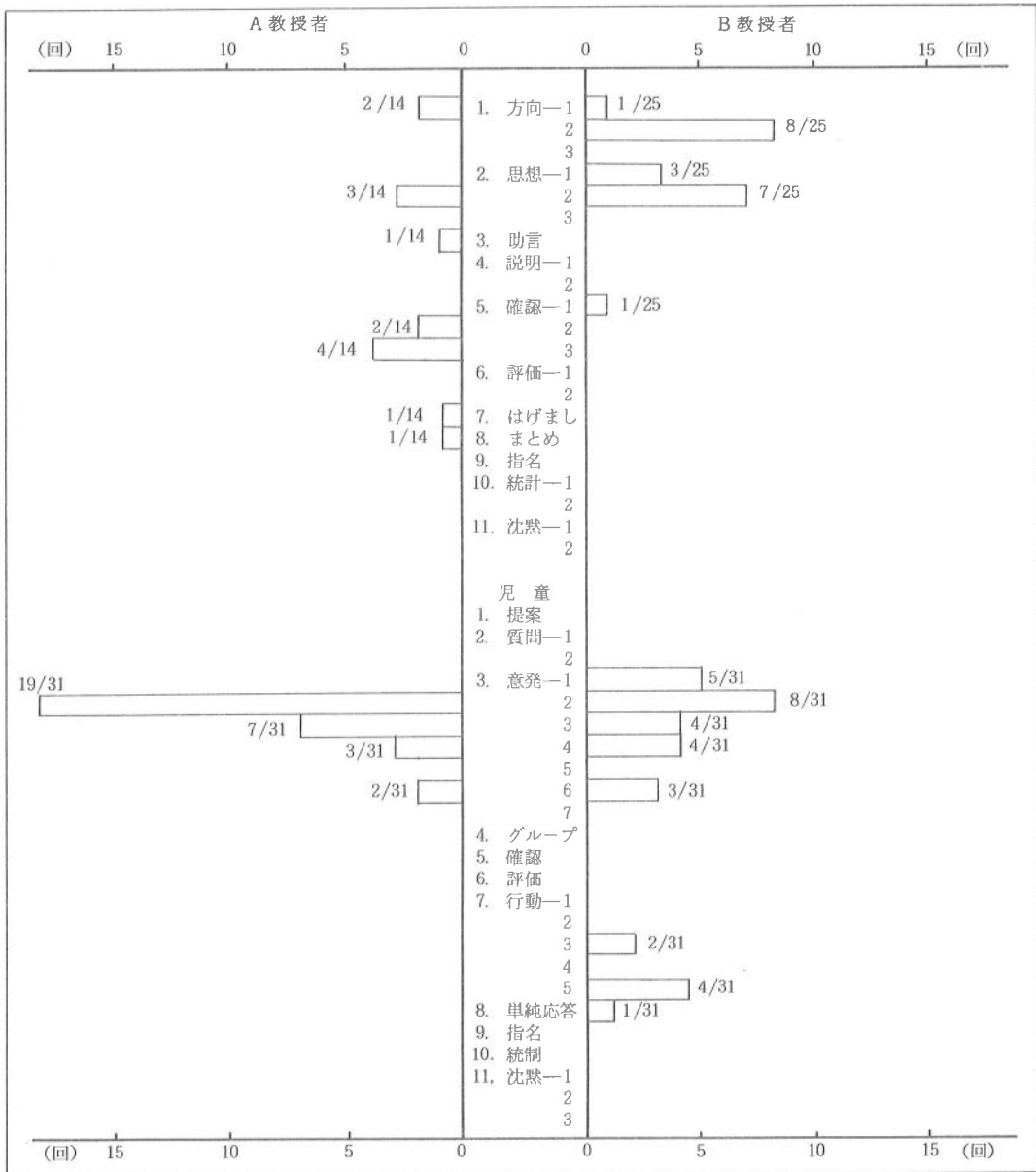
1) 1-G-a (エプロンを使った生活の様子を話すことができる)において、B教授者はノート提示(1, 方向-2)が多い。また教師の発問に対して児童が答えるという状態で、発問にも関連性がみられない。ときに1-G-aの目標において中心となる3, 意見発表-2・3(事実的なこと・気づいたこと・感想)がA教授者に比べると少ない。逆に、意見発表の内容は知識や概念的なことが多く、実際の生活におけるエプロンについて具体的に見つめていなかったことがわかる。一方、A教授者は、授業

a. コミュニケーション分析のカテゴリーシステム

教 師		児 童	
1. 方向づけ	1. 学習課題の提示 2. 行動の指示(作業・ノート指示) 3. 情報提示(ことば・資料)	1. 提案 2. 質問	1. 教師に 2. 児童に
2. 思考要求発問	1. 閉じた発問(単純発問) 2. 開いた発問(深い思考や判断を要求する) 3. ゆさぶり発問(繰り返し)	3. 意見発表	1. 知識・概念的なこと 2. 事実的なこと 3. 気づいたこと・感想 4. 疑問に思ったこと 5. 願い 6. 理由 7. その他
3. 助言・示唆			
4. 説明	1. ことばによるもの 2. 行動によるもの(示範・モデル)	4. グループ討議	
5. 確認	1. 問い返し 2. くり返し 3. 確認	5. 確認 6. 評価	
6. 評価	1. 肯定的 2. 否定的	7. 行動	1. 実験 2. 観察 3. 朗読 4. 作業 5. その他
7. はげまし			
8. まとめ			
9. 指名			
10. 統制	1. 学習訓練(家庭科における基本的姿勢) 2. しつけ	8. 単純反応・応答 9. 指名 10. 統制	
11. 沈黙	1. 困惑 2. 受容	11. 沈黙	1. 思考 2. 作業(学習内容と関係なし) 3. 単なる中断

(OSIA. Observational System for Instructional Analysis)

## (1-G-a) エプロンを使った生活の様子を話することができる



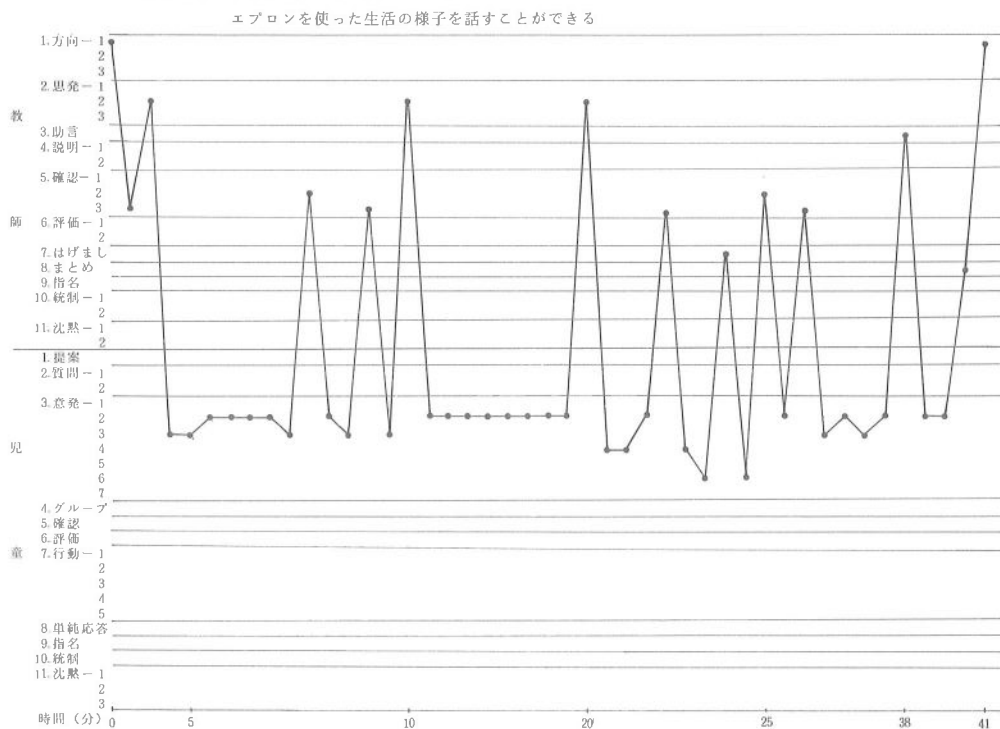
前にエプロンに関わる生活を見つめさせ、ノートに既に記入させてあったため、児童は気づいた事実を次々に、関連発表することができ、教師も思考要求発問（2思発）や確認（5確認）が多く、授業の深まりがみられた。

授業の流れについて、A教授者では、発問数が少なく、ほとんど児童の意見発表が中心に流

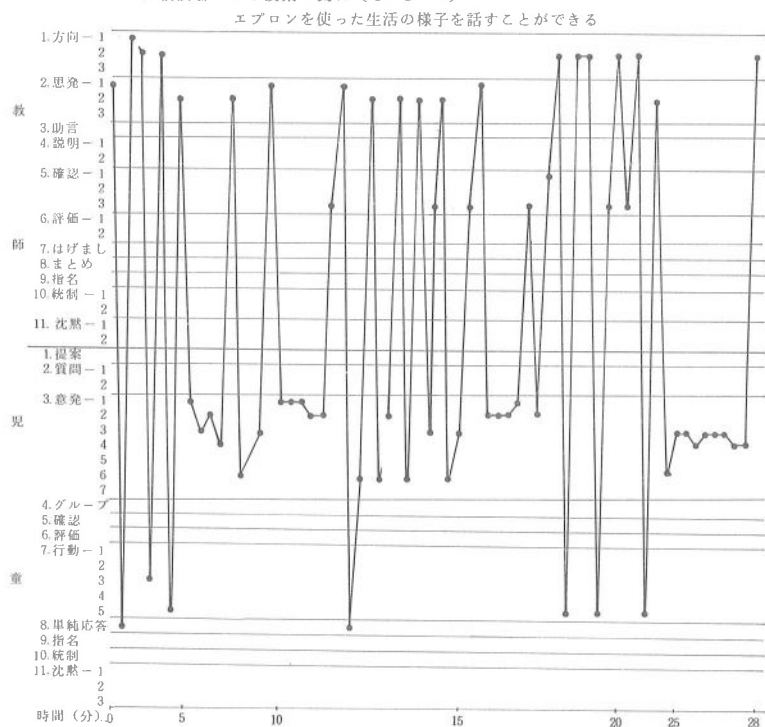
れている。一方、B教授者では、学習ノートに書いてある発問をするだけで、発問と発問の間に関連性がない。児童も、その発問に対して答えるのみで深まりが見られなかった。

以上今回は一部の報告であるが、全体的な傾向としては、まず、B教授者はA教授者に比べ発言数が少なく、児童の意見発表（疑問や提案

A 教授者による授業の流れ (1-G-a)



B 教授者による授業の流れ (1-G-a)



も含む) も少ないことがいえる。また発言の内容は「発表して下さい」とか「ノートに書いて下さい」という提示的発言が、B教授者の方が多い。逆に、さぐりを入れる解明行動を伴った探査的発言は、A教授者の方が多い。従って教授スキルが学習者の認知過程に及ぼす影響については、A教授者の方が具体的に問題点を探りながら授業を進めているため学習者自身が課題を持って取り組んでいる。B教授者は指導内容についてやや問題がみられるので、今後はその点を考慮して学習指導設計を考える必要がある。

#### おわりに

家庭科の学習指導設計において、だれでも使える指導案・学習ノートを作成し、実際に教授者が授業実践した結果

今回は「エプロン製作」という大題材をとりあげたために、時間数の大幅な延長や指導内容の複雑さから、家庭科をはじめて教える教師にとっては、困難すぎる点もあった。このことから指導案の改善の方向として次のことが考えられる。

- 1) 題材設定の理由を書くこと。
- 2) 具体的な発問を入れる。

以上だれでもが使える指導案・学習ノートの改善の方策を述べたが、家庭科は他の教科と違って技術を含む多くの内容のあるものは児童にわかりやすく指導するため、教材としてVTRやスライドを使用することがよいと考えられる。今後改善される指導案・学習ノートを使って授業実践を進め専門外の教師にもできる家庭科の

指導にもっていきたいと思う。

最後にこの研究を進めるにあたり、小島トミ、野村令子、原淑子、武藤恵津子先生はじめ御協力いただきました富田比登美、中斎喜久代嬢に謝意を表わします。

#### 文 献

- 1) 大塚明郎編 (1977) “教育工学の新しい展開” 第一法規
- 2) 中野刀子・東海聖子・藤井美保 (1979) “家庭科教授・学習設計のための実証的研究(1)” ～小学校教授・学習設計への調査評価項目の検討～ 岐阜大学CRDCデータレポート No. 63
- 3) 中野刀子・若井裕子・鷺本木実・小島トミ・後藤忠彦 (1979) “家庭科教授・学習設計のための実証的研究(2)” ～教授・学習設計のための意識調査項目の分析・評価～岐阜大学CRDCデータレポート No. 64
- 4) 中野刀子・東海聖子・藤井美保 (1980) “家庭科教授・学習設計のための実証的研究(3)” ～家庭生活と基礎技能の関連についての分析～岐阜大学CRDCデータレポート No. 75
- 5) 中野刀子・若井裕子・鷺本木実 (1980) “家庭科教授・学習設計のための実証的研究(4)” ～家庭科教育における調査方法の解析処理について～ 岐阜大学CRDCデータレポート No. 76
- 6) 小金井正己 (1977) 教師教育と教育工学 (その1), 日本教育工学雑誌 Vol. 2 No. 4
- 7) 小金井正己 (1980) 教師教育と教育工学 (その2), 日本教育工学雑誌 Vol. 4 No. 3